

佐紀古墳群を歩く

(会員) 野村 武司

七月二十五日(土)、九州、山口県での集中豪雨居座り状態が続くなか、四月より持ち越された現地見学会を再度延期させたくない皆の想いが、中司先生を始め十二名を近鉄西大寺駅に集合させたものと思う。京都線に乗り換え平城駅下車、北に向かつて歩き始める。

神功皇后狭城盾列池上陵

奈良市山陵町字宮ノ谷

前方部を南に向ける前方後円墳。五社神古墳ともいい、佐紀盾列古墳群中の一基で、もともと北西に位置している。北から南に延びる丘陵に立地し、典型的な丘尾切断形式である。主軸全長二七三メートル、後円部径一九六メートル、高さ二三メートル、

前方部幅一六八メートル、高さ二七メートルを測り、周囲に周濠をめぐらせている。墳丘上に石材の露出していること、円筒埴輪等の存在が報告されている。

墳丘外周を廻る。藪が深く歩きにくい、(数年前には墳丘を囲む柵などはなかったらしいが)現在は新しい御影石の石柱が立ち並び有刺鉄線が張り巡らされている。後円部の北端部分には周濠はなく北西部に続く丘陵部の間を鉋で切り込みを入れたような大雑把な仕事で終わっている。測量図では七つの濠の存在を示しているが、この先端部には濠がない。

成務天皇狭城盾列池後陵

奈良市山陵町字御陵前

佐紀古墳群西群中の一基で佐紀石塚山古



成務天皇狭城盾列池後陵

墳ともいう。前方後円墳。主軸全長二一八・五メートル、後円部径一三二メートル、高さ一九メートル、前方部幅一一メートル、高さ一六メートルを測り、前方部を南に向けている。墳丘は三段築成で周囲に濠をめぐらせている。

周濠は前方部の部分が広い。葺石の存在が知られており、石棺の存在及び勾玉五〇、管玉一〇〇を検出したとの文献あり。

ひばすひめのみこ
日葉酢媛命（垂仁天皇皇后）狭木寺間陵

奈良市山陵町字御陵前

佐紀陵山古墳ともいう。前方後円墳。主軸全長二〇六メートル、後円部径一三〇メートル、高さ一八メートル、前方部幅八メートル、高さ一二・三メートルを測る。

墳丘は三段築成で三区に区切られて水位を異にする周濠をめぐらせている。葺石と埴輪の存在が知られ、きぬがさ形（高さ一・五メートル、横幅二メートルの巨大さは他に類を見ない）・盾形・家形埴輪や鱈付円筒埴輪が出土している。後円部中央に墳丘主

軸に平行して

竪穴式石槨が存在する。石

槨は内法長さ

八・五五メー

トル、幅一・

〇九メートル、

高さ一・四八

メートルを測

り、東西の側

壁は扁平な割

り石を敷いた

ものである。

天井石は五枚あり、その内三枚には縄掛突起が見られる。

『書紀』による伝承では皇后がなくなっ

たとき、古来の風習による殉死の悲惨さを避けるために土製の人・馬をつくって墳丘の周囲に埋められたとされ、これが埴輪の起こりといわれている。

北西に立地する成務天皇陵との間は狭く、狭い土地に二つの大型古墳を築こうとした



ために、日葉酢媛命陵の後円部が成務天皇陵のくびれ部にくいこんだ配置になっている。このため、成務天皇陵の東側の濠は極端に狭くなっている。日葉酢媛命陵が先に築造されたことがわかる。

瓢箪山古墳

奈良市佐紀町字衛門戸

佐紀丘陵の緩やかな南斜面に築かれた中規模の前方後円墳。主軸全長九六メートル、後円部径六〇メートル、高さ一〇メートル、前方部幅四五メートル、高さ七メートルで南北に主軸を置いている。

一九七二年の範囲確認調査で周濠が確認されたが、前方部から西斜面にかけての周濠はなかった。これは先行して築かれていた丸山古墳をさけるためであったと考えられる。河原石の葺石と円筒埴輪がみとめられるが、埴輪はその量が極めて少ない。古墳の年代は四世紀後半と推定される。国指定史跡。

広場にて昼食休憩。豊中市内は大雨と携帯電話が入る。食事終わり頃ポロツと雨粒

が落ちる。

佐紀古墳群東群域に近付くにつれ雨足は強くなる。傘、リュックカバー、スパッツ着用の人も見受ける。雨具迄はまだ大丈夫。

磐之媛命（仁徳天皇皇后）平城坂上陵ならさかのののみこみさき

奈良市佐紀町字ヒシヤゲ

佐紀古墳群東群に属する前方後円墳。ヒシアゲ古墳ともいう。主軸全長二一九メートル、後円部径一二四メートル、高さ十六・二メートル、前方部幅一四五メートル、高さ一三・六メートルを測り、前方部を南に向ける。墳丘は三段築成、右側くびれ部に造出しを持っている。周囲に濠をめぐらせており、現在前方部は二重濠となっているが、東側墳裾と外堤で円筒埴輪列の存在が知られている。磐之媛は仁徳天皇の皇后であるが天皇の女性関係を巡って愛と嫉妬に苦悩したと伝えられている。

コナベ古墳 奈良市法華寺町字小那辺

前方後円墳。全長二〇四メートル、後円

部径一二五メートル、高さ二〇メートル、前方部幅一二九メートル、高さ一七・五メートルを測り、前方部を南に向けている。墳丘は三段築成で、左右のくびれ部に台形の造出しを持つ。周囲に盾形周濠がめぐり、葺石と円筒埴輪列がある。

かつて盗掘によって墳丘最上段の埴輪列の埴輪には黒斑が認められる。前方部西側から後円部北側にかけての周濠外には、円墳一基と、方墳九基が陪塚的位置に整然と並んでおり、中期古墳における



主墳と陪塚群の典型例とされることも多い。五世紀前半頃の築造と考えられ『廟陵記』には石棺らしきもの？の存在も記されている。

ウワナベ古墳 奈良市法華寺町字和那辺

前方後円墳。佐紀盾列古墳群東群中の一基で、東端に位置している。主軸全長二五六メートル、後円部径一二九メートル、高さ二〇メートル、前方部幅一二七メートル、高さ二〇メートルを測り、前方部を南に向けている。墳丘は三段築成で、左側くびれ部に造出しをもち、周囲に幅の広い周濠をめぐらせている。円筒埴輪列と葺石が存在する。一九六九年には東側外堤の発掘調査で、鱗付円筒埴輪を主とする埴輪列が検出された。かつて東側に一基、北側に五基の陪塚が存在し、大和六号墳からは多量の鉄鍔が出土している。五世紀中葉頃の築造と考えられる。



不退寺 金龍山不退転法輪寺

奈良市法蓮町五一七

仁明天皇の勅願を受け、在原業平が開基したとの由緒から「業平寺」とも呼ばれる。

寺伝によれば大同四年（八〇九年）、平城天皇が譲位して後、隠棲し、「萱の御所」と称したのが、始まりとされ、平城天皇の皇子である阿保親王、更に阿保親王の五男である在原業平が暮らしたという。

伊勢神宮参詣時に受けた神勅を機に、業平が自ら聖観音を刻み「不退転法輪寺」と号して阿保親王の菩提を弔ったのが寺院としての始まりと伝えられている。

寺の周辺からは平安時代前期の古瓦が出土しており、創建がその頃までさかのぼることは認められるが、中世以前の沿革はあまり明らかでない。

五世紀の石棺（ウワナベ古墳南東の平塚一号墳〔現・国道二四号下にかつて所在し、早く削平〕で発掘されたもの）が寺内に置かれている。



狭岡神社 奈良市法蓮町

延喜式神名帳 狭岡神社八座 大和国添上郡鎮座

祭神 若山昨之神（ワカヤマクイノカミ）

若年之神（ワカトシノカミ）

若沙那比賣之神（ワカサナメノカミ）

弥豆麻岐之神（ミズマキノカミ）

夏高津日之神（ナツタカツヒノカミ）

秋毘賣之神（アキヒメノカミ）

久々年之神（ククトシノカミ）

久々紀若室葛根之神（ククキワカム

ロクズネノカミ）

神亀二年（七一五年）に、藤原不比等が、勅許を得て、自分の邸で「佐保殿」の丘に天神八座を祀ったことに始まった。

藤原氏の禊ぎ場として建てられたといわれ、藤原氏は国政の大事や氏神春日詣りに参籠し、日の出を待って国政に掌ったという。

もと天神社を狭岡神社としているが、明治七年明細帳は「或伝言、式内社狭岡神社」

としているだけである。当社であるという根拠は恐らく佐保がサオカと転訛するとうりだけである。

階段左手に「佐保姫旧跡保存地」という窪地があり、禊ぎ場の跡という。

佐保丘天神とも呼ばれており、菅原道真を祭神とするという説もある。

大伴安麻呂を佐保大納言と呼ぶように大伴氏と関連の深い地域。

予定コースは無事に巡り終えた。雨も心配された程のこともなく、コースの終わりには傘もしまいこまれた。

知られざる「大佛鉄道記念公園」で小休止の後、近鉄奈良駅に向かい現地解散となる。毎回到りわり現地見学の計画、資料作成から詳細な説明まで、中司先生本当に有難うございました。



考古学の基礎講座

知っているようで、知らないことも多い考古学の基礎知識を折りに触れて、中司照世先生にわかりやすく解説いただきます。

考古学では一般に墳丘外周の溝状遺構を、

「周濠」―墳丘外周の水を湛えた幅広の濠

(ただ、水の無い場合「空濠」とも)

「周溝」―墳丘外周の水の無い幅狭の溝

という。

なお、この用語は、畿内を始めとして広く学会で多用されている。だが、関東を中心とする一部の研究者などは、意識的に「周堀」の用語を墨守。

畿内などでは、現在もなお水を湛えた大型古墳の外周の濠の存在が顕著であるが、畿外では水を湛えた濠はまず見受けられない。「濠」も「堀」も意味は同じであろうが、ともに主に城など大型構造物の付属施設を呼ぶ場合がふさわしい。周濠は古くは「周堀」とも呼ばれた。だが、小型構造物に付

属し水の無い「周溝」との混同を避ける意味からも、現在は用いられていない。

そのほか、丘陵の稜線を切断し墳丘を削り出して造営した例など、丘陵との切断箇所等、ごく一部のみに認められる遺構をも「周溝」「周濠」と記述した文も存在する。

しかし、墳丘の外周全域を巡らない部分的な遺溝をこのように呼ぶのは、これらの学術用語の使い分けの意味を十分に承知していない、研究者である場合が多い。

ちなみに、丘陵の稜線の切断箇所を遺構を呼ぶ場合には、「掘割」「溝」「切通し」など、いくつかの呼び方が混用されている。

私は、山城の「掘割」や「縦堀」と同じようなさほど幅の広くない遺構が大半であり、やはり「掘割」か単に「溝(溝状遺構)」とするのが穏当ではないか、と考えている。

十月の桜井茶臼山の現地見学でさっそく知識を役立ててください

(編集部)

読書室

『日本書紀〈神代巻〉を読む』

皇學館大學記紀研究会

(代表 荊木 美行)

富山県神社庁教化委員会教学部会

(特別価格 一二〇〇円)

本書は『日本書紀』巻一・二の神代巻と『古事記』上巻の現代語訳を中心に構成されており、一般の方々にもわかるように、難解語句には注釈も付いています。また『日本書紀』へのお誘い・『日本書紀』の写本と注釈―読書史をたどる―といった解説を付し、『日本書紀』に対する総合的な理解を深めていただけるよう、配慮されています。市販されていませんので、ご希望があれば、山口会長までお申込みください。

後期の例会のテーマは「古代神話の謎を探る」です。お手元において活用されてはいかがでしょうか。



くえ彦てふ出雲の紫山子海にらむ

宮田 佐智子



十一月の例会

十一月十四日 (土) 午後二時より
会場 豊中市教育センター

「スサノオの神話」

皇學館大學 教授

荊木 美行 先生

十一月の現地見学

樽井から淡輪方面を予定しています。詳しくは後程お知らせします。

編集後記

例会で講演して頂いた先生方には、いつも講演要旨の執筆をお願いしております。お陰様で先生方からは、力作続きの講演要旨を頂き、有難いことと感謝いたしております。

小誌は会員のつくる会員のための機関誌です。会員諸氏の積極的なご寄稿をお願いします。論文だけでなく、紀行文、書籍・各種催し物の紹介など何でも結構です。記事がちやうど偶数頁に納まるためには、短い記事も必要です。デジカメ写真一枚に説明文、俳句・短歌や短文も歓迎です。是非ご寄稿をお願いします。

<http://homepage2.nifty.com/toyonakarekishi/>